

Donne と Paradoxical Technique

朝 倉 秀 之

序

Donne は詩や散文（説教集も含めて）の中に paradoxical technique を数多く用いている。それが1つの特徴ともなっているが、何時頃から始まり、どのような変化を見せているかを研究しようとするのがこの小論の目的である。

Paradox¹⁾という語は、OED の用例によると1540年が最初に用いられたことになっている。paradox という文学形式が成立していたことは興味のあることであるが、厳密な意味で哲学、論理学の paradox と文学の paradox の区分はむずかしい。少なくとも現在、Donne の時代の paradox という文学形式は無くなって哲学や論理学や数学の中で論じられることになる。

Shakespeare は paradox, paradoxes という言葉を5例用いている。

o paradox!²⁾
you undergo too strict a paradox,³⁾
this was sometime a paradox, but now⁴⁾
as stuff these two to make paradoxes⁵⁾
these are old fond paradoxes to make fools laugh⁶⁾

Shakespeare の作品に見るように paradox という形式には新しい流行の知的言葉遊びが含まれていることを知ることができる。

1) 『岩波数学辞典』の paradox (「逆理」) の項に次のように記されている。

「一般の判断に反する結果を導く論説があつて、その説に反論する正当な根拠を見出しがたいとき、その説を逆理(または逆説)という。とくに、ある命題とその否定命題がともに論理上同等と思われる論拠をもって主張され、それに至る推論のなかに誤りを明確に指摘することができないとき、これを二律背反という。しかし二律背反と逆理とは厳密に区別して用いられる言葉ではなく、同義的としても使用される。」

2) *Love's Labor's Lost*, IV, iii, 254

3) *Timon of Athens*, III, v, 24

4) *Hamlet*, III, i, 114~5

5) *Troilus and Cressida*, I, i, 184

6) *Othello*, II, i, 139-40

朝 倉 秀 之

このような状況にあって Donne がどのように paradox を考えていたのか、また paradoxical technique を使っているかを考察していくこととする。

I

Donne の作品に『逆説と課題』(*Paradoxes and Problems*) というのがある。「Donne の詩を愛する人にとって、『逆説と課題』は短い散文作品の中でも最も面白い」と1980年 Helen Peters は自分の博士論文を発展させ、編集した本の序文で述べている⁷⁾。Donne は当時、流行していた様々の形式を用いて作品を書いた。satire, epigram, verse letter, elegy, epithalamion, anniversary, epicede, love song, holy sonnet, essay など幅広い表現方法を用いている。

Donne の『逆説と課題』を吟味する前に、『恋愛詩』(*Songs and Sonnets*) 中にある「逆説」(The Paradox') という題のついた詩を見てみよう。

We dye but once, and who lov'd last did die,
 Hee that saith twice, doth lye :
 For though hee seeme to move and stirre a while,
 It doth the sense beguile.
 Such life is like the light which bideth yet
 When the lights life is set,
 Or like the heat, which fire in solid matter
 Leaves behinde, Two hours after.
 Once I lov'd and dyed ; and am now become
 Mine Epitaph and Tombe.
 Here dead men speake their last, and so do I ;
 Love-slaine, loe, here I lye⁸⁾.

一生に死ぬのは一度、恋して死んだ、と

二度言う奴は、嘘っぱち

しばらく歩んで、動いていても

それは感覚麻痺状態

所詮そんな生命、太陽沈んだあとも

しばらく漂う光にすぎぬ

はたまた炎にたとえるならば

二時間すぎまでもつ余熱

7) Peters, H., ed., *John Donne : Paradoxes and Problems*, Oxford, 1980, XV.

8) Gardner, H., *Donne : The Elegies and Songs and Sonnets*, 1965, p.38.

一度、恋して死んだぼく、今や
 はかなき墓碑銘よ
 ここで死人が一息入れて、辞世の句
 見よ、恋に死にたるワレネムル

Helen Gardner の説によると、「恋は見分けられない」(‘Love cannot be known’) という命題を証明するために書かれた詩である。Donne と友人がその出来ばえを競ったのであろうという推測である。このように一般に多くの人たちが頑固に抱いている考えを打ち破るのに paradox を用いた。最後の行 (20行目) の here I lye は両義 (double entendre——①「ここでぼくは死んで眠っています」と ②「ここでぼくは嘘をつく」) がかくされていて、Donne はこの Paradox という題をつけた詩の最後で言葉遊びをしている。

Donne は『逆説と課題』(*Paradoxes and Problems*) を若い頃にした。paradoxes は Donne が18歳から25歳の頃であり、problems はそれより後(1603年～1610年)ということになる。paradoxes を書いていた頃は前途洋々で未来に誇りと自信を持っていた時代であり、同時に『諷刺詩』(*Satyres*) や『エレジー』(*Elegies*) を書いていた時期とも重なる。

Donne が18歳というと1590年であり、翌年5月には Thavies Inn に入り、1592年5月には Lincoln's Inn に入学が認められている。paradox についての Donne 自身の言葉は彼の手紙によると次のようである。

Sir

Only in obedience I send you some of my paradoxe I love you and myself and them too well to send then willingly for they carry with them a confession of their lightnes, and your trouble and my shame But indeed they were made rather to deceave tyme than her daughter truth: although they have beene writter in an age when any thing is strong enough to overthrow her. If they make you to find better reasons against them they do their office: for they are but swaggerers: quiet enough if you resist them. If perchance they be pretyly guilt, that is theiv best for they are not hatcht: they are rather alarums to truth to arme her than enemies.⁹⁾

(従順な気持から、ぼくは『逆説』を君に数篇送ります。君のこと、ぼく自身、それに『逆説』をととても大切にしているので、喜んで送れないくらいです。というのもその中で不真面目なこともあらいざらい書いてあるし、君が迷惑することやぼくの恥もあるからです。でも実を言う気ばらしに書いたので真理のためではありません。しかし全部、時を乱すに十分に強烈な

9) Gardner, H. & Healy, T., *Simpson's John Donne Selected Prose*, Oxford, 1967, p.111.

この手紙は日付け (1600年と言われている)、宛名 (Sir Henry Wotton 宛) がはっきりしていない。

朝 倉 秀 之

時代の中で書いたのです。もし、『逆説』に対するより正統な理由が見つければ、その役目を果たすことになります。なぜなら、『逆説』は酔っぱらいにすぎませんから。おさえてくれば、すぐ静かになります。もし偶然にもちゃんと罪になれば、それは最良です。『逆説』は、陰謀ではないからです。すなわち時を武装させるための真実への警報であり、敵ではないのですから)

この手紙の中に Donne の paradox に対する姿勢が良く表われていると思う。paradox は OED では16世紀の中期から使用されたことになっているが、paradox の歴史はもっと古く遡ることになる。

II

文学的 paradox には2つの形式があった。記録されている一番古い形式は、ギリシャの作家 Gorgias (c.483-376BC) と Isocrates (436-338BC) が書いたトロイのヘレネーの「擬似頌詞」(the mock encomiums) の中に見られる。この「擬似頌詞」は Erasmus の『愚神礼讃』(*Moriae encomium*) や Hucbald of St. Amand の『禿頭称讃』(*Ecloga de laudibus calvitii*) や11世紀の Michael Psellus や12世紀に入って Joannes Tzetzes に受け継がれてきた。そのような文学形式については H. K. Miller が詳しい研究論文を発表している¹⁰⁾。文学的パラドックスのもう1つの流れは、前述した哲学、論理学、数学につながる形式である。一見いかにも不合理なまたは矛盾・撞着しているようでありながら、その実、鋭く真実を衝いている表現である。これは Cicero (106-43B.C.) の『ストア的逆説』(*Paradoxa Stoicorum*) の中で用いられた。ストア哲学の重要な倫理的教えについての真面目な作品である。

古典的 paradox の両方の形式ともルネサンス期には人気があった。一番影響力を持った「擬似頌詞」は Erasmus の『愚神礼讃』である。1509年に書かれ、1511年に初めて出版され、1549年 Sir Thomas Chaloner により翻訳された。*The Praise of Folly* は John Wilson (1668) そして White Kennett (1683), Hoyt Hudson (1941), Leonard F. Dean (1946) の英語版を持つこととなった。Erasmus の作品を Donne はラテン語で読んだであろう。Paradox VII に Erasmus の『愚神礼讃』に関連した記述がある¹¹⁾。『愚神礼讃』の複雑な構造にもかかわらず、その作品が影響を強く及ぼして、英国でたくさんの「擬似頌詞」を産むこととなった。他の「擬似頌詞」も16世紀に英国で翻訳された。その中には H. C. Agrippa の『ロバ称讃の余談』(1569) Synesius の『禿頭礼讃』(*Calvitii encomium*) (1579), A. Banchieri の『ロバの気高さ』(*La nobilita dell' osino*) (1595)。R. E. Bennett によると3冊とも Donne は読んでいた¹²⁾。

Ortensio Lando が16世紀にイタリアに別の paradox を改めて紹介した。最初の作品は Cicero

10) Miller, H. K., 'The Paradoxical Encomium with Special Reference to its Vogue in England', *MPLIII* (1956), 145-50.

11) Paradox VII, 11. 8-12.

12) Bennett, R. E., 'The Addition to Donne's Catalogus Librorum', *MLN* xlviii (1933), 167-8.

relegatus et Cicero revocatus (1534) で一方が非難すると他方が許すという対話形式で Cicero の伝統を受け継いでいる。1543年に Lando は『逆説・即ち常識を超えた金言葉』(*Paradossi cioè, sententie fuori del comun parere, novellamente venute in luce*) 二冊本で30の paradox が入っているものを出版した。命題として「金持ちより貧乏の方が良い」(Paradox I), 「美より醜」(II), 「英知より無知」(III), 「素面より泥酔」(VII), 「不正直な妻を持つのは嫌ではない」(XI), 「長命より短命」(XIV), 「落胆しないのは悪い」(XVII), 「私生児でいるのは非難されるべきことではない」(XVIII), 「平和より戦争の方が良い」(XX), 「女は男より優秀である」(XXV), 「大胆より臆病の方が良い」(XXVI)。Lando の paradox は Cicero の伝統の中であって、当時の社会に一般的に受け入れられていた事柄に反対の見解を述べている。現在ではあまり強烈な paradox ではなくなったものもあるが、多くは今も通用する基本的には教訓であり、時には偉大な学識と機知を用いて展開される。Lando の paradox をフランス語に1553年、C. Estienne が翻訳した。Estienne 版から12の paradox が A. Munday によって英語に翻訳された。『逆説の弁護』(*The Defence of Contraries: Paradoxes against common opinion*) がそれである(1593)。さらに Lando の英語訳が17世紀、18世紀にかけて出版された。

大陸の paradox 翻訳の影響を受けて、16世紀末に英国の作者たちは paradox を書き始めた。Donne が paradox を書いた時に影響を受けた人物は Martial¹³⁾, Erasmus, Ortensio Lando の3人である。特にその命題とその証明の構造において Lando の影響は大きい。次に Donne 自身の Paradoxes の検討に入っていくこととする。

III

Donne が Lando の影響を受けたとは言え、Donne の Paradoxes はいつも単純ではなく、同じ内容であっても一ひねりしてあることが多い。Paradoxes に使われている言葉は直接的で口語体であるが、Donne の修辞学的技巧がほどこされているのは明瞭である。

① antithesis (対照法), ② pun on the double meaning (二重の意味), ③ repitition (反復), ④ parallelism (並列), ⑤ colloquial vigor (口語的力強さ), ⑥ irony (皮肉) などの特徴などが見られる。その命題を分類¹⁴⁾してみると、女性に関するものはII (女性と化粧) とX (女性と美德), 死に関するものはI (自殺について) とV (臆病者と死), その他は単独にIII (老人と若者), IV (自然と人間), VI (肉体と精神), VII (賢者と笑い), VIII (善と悪), IX (不一致と一致) などである。

Donne の Paradoxes 研究の中で問題になっているのは「何故 Donne が Paradoxes を書いたか、という問に対する2つの答え」である。1つは Donne が Paradoxes を真面目に書いたという説で、もう1つは Donne がいわゆる修辞学的遊びで書いたとする説である。前者の筆頭は Evelyn

13) Paradoxes V, VII (2回), IX (2回), Xの5箇所 Donnes の引用がある。

14) Helen Peters の命題順による。

朝 倉 秀 之

Simpson¹⁵⁾で、後者には P. N. Siegal¹⁶⁾がいる。そのどちらの説をとるのかは、前にも引用した Donne 自身の手紙の解釈にもかかっているのであるが、Donne の手紙を文字通りとると、‘they were made rather to deceave tyme than her daughter truth’ というように、ひまつぶしに書いた感じがしないでもない。しかし、そう言いながらも Donne は自分の Paradoxes の本来の働きを述べている。前に引用した文に続くところに次のような文章がある。

and they have only this advantadg to scape from being caled ill things that they are nothings: therefore take head of allowing any of them least you make another.¹⁷⁾

一般的に支持されている意見、あるいは偏見を打ち破るのに最も効果的な方法が逆説であることを十分に知りつつ Donne は Paradoxes を書いていることは確かなことである。だからここの文の前のところで ‘they (paradoxes) are rather alarums to truth to arme her then enemies’ と書いているのである。実際 Donne の Paradox を検討していくと、どちらの説も取ることが出来るのである。

Paradox IX (*That by Discord things increase*) は Lando の Paradox XX (「平和より戦争の方が良い」) と同じ系列に属するものである。この Paradox IX (「不一致で物事は繁栄する」) を Donne は当時の医学と肉体の関係から一致しないこと、あるいは対立することがいかに大切かを証明していく。

So I assever this the more boldly, because while I maintaine it, and feele the contrary repugnances and advesse figthings of the Elements in my body, my body increaseth; and whilst I differ from common opinions, by this discord the number of my Paradoxes encreaseth. All the riche benefitts which we can faine in concord is but an even conservation of things; in which evennes we may expect no change nor motion; therefore no encrease or augmentation, which is a member of motion.

(そこで私はこの『逆説』をさらに大胆に断言する。なぜなら私がそれを主張し、肉体の中の反対の憎悪感と四体液の異った対立を感じる間に、私の身体は成長する。そして私の常識力と他は違った意見である間、この不一致でかなりの数の私の『逆説』は豊かになる。私たちが一致の中で呼びおこすことのできる豊かな恩典すべては物事を穏やかに保つだけである。その穏やかさの中に私たちは変化も動きも何も期待していない。それゆえに成長もなければ増大もない。それが活動の一部である。)

15) ‘Donne’s *Paradoxes and Robléms*’, *A Garland for John Donne*, ed., T. Spencer (Gloucester, Mass., 1931), p.23-43.

16) Siegal, P. N., ‘Donne’s *Paradoxes and Problems*’, *PQ* xxviii (1949), p.510.

17) Gardner, H. & Healy, T., *Simpson’s John Donne Selected Prose*, Oxford, 1967, p.111.

Donne と Paradoxical Technique

Donne はこの Paradox を証明する中で自分の『逆説』が豊かになるのは一般の常識と異なっているからであると述べている。

But it is the nature and office of Concord to preserve only ; which property when it leaves, it differs from it self, which is the greatest Discord of all. All Victory and Emperyes gain' d by war, and all judiciall decidings of doubts in peace, I claime childrer of Discord. And who can deny that Controversies religion are growne greater by Discord ; and not the controversies only but even Religion it self.

一致と不一致とを並列させることよっての働きを対照させて注目させ、一致と不一致の役目は異なることを述べている。対立することよって宗教論争は活発になり、論争だけではなく宗教も共に成長するのであると展開している。当時の論争神学¹⁸⁾に興味を持っていた Donne にとってはこの Paradox の意図していたこと Donne 自身の意見とは同じになっていると言える。

Paradox X (*That it is possible to find some vertue in some women*) と Paradox II (*That women ought to paint themselves*) は女性に関するものである。女性に関するものは当時の女性の地位とかを考え合わせなければこれが Paradox として理解できないであろう。Donne 自身がこの Paradox X を述べるに当って最初から弁解がましく始めている。

I am not of that sear'd impudency that I dare defend women, or pronounce them good : yet when we see phisitians allow some vertue in every poyson, alas why should we except women?

ダン は説教集の中で同じような言葉の使い方をしている。

God can extract good out of bad, and Cordials out of Poyson.¹⁹⁾

Donne は Plato や Martial の言葉を引用しながら証明していくが、Donne の恋愛詩に出てくるように皮肉が込められている。最後はこのように終る。

These or none must serve for reasons : and it is my great happines that Examples prove not rules, for to confirme this opinion the World yields not one Example.

Paradox II は女性の中の自然美と人工美に対する男性の態度があいまいであることを攻撃し

18) 朝倉秀之, 北陸学院短期大学「紀要」第14号, p.79-91.

19) Potter & Simpson, ed., *The Sermons of John Donne*, IV, p.97.

朝 倉 秀 之

ながら女性の化粧を弁護している。しかし、そのように論を展開する Donne 自身が他の詩の中では化粧に対してあいまいである。

Since there must reside,
Falshood in woman, I could more bide,
She were by art, then Nature falsily'd,²⁰⁾

Who forbids his beloved to gird in her wast, to mend by shooin her uneven lamenes, to burnish her teethe, or to perfume her breathe? Yet that the face be more precisely regarded it concernes more.²¹⁾

Donne は友人に語りかけるように、「君が彼女にキスしたり、息をふきかけている時、化粧が剥げたら怒るだろう。化粧がそのままなら怒るだろうか？ 君は化粧しているのを知らなかったとしても、化粧していた彼女を愛したのだ。もし化粧が剥げ落ちて嫌いになっているのなら、君は化粧していない彼女が嫌いになっているんだ。もし君が今になって化粧していた彼女が前から嫌いだったなどと言うなら、どっちつかずだったのだ。」と言って責める。だから何ごとも節操を守って、君に愛をそそぐ彼女を愛しなさい、と終る。身体を飾ったり美しくしたりする限度については説教の中にも取り上げている。

Certainly the limits of adorning and beautifying the body are not so, narrow, so strict, as by some sowre men they are sometimes conceived to be. Differences of Ranks, of Ages, of Nations, of Customes, make great differences in the enlarging, or contracting of these limits, in adorning the body ; and that may come neare sin at some time, and in some places, which is not so alwaies, nor every where,²²⁾

Paradox III (*That old Men are more Fantastique then younge*) は老人の方がきまぐれであるという Paradox である。この Paradox で Donne は 'fantastique' の言葉遊びをしている。① existing only in imagination, unreal, ② of the nature of a phantasy, ③ imaginative, ④ of persons, ⑤ arbitrary devised, ⑥ eccentric, quaint or grotesque などの意味を使いわけながら

To be fantastique in yong men, is a conceitful distemperature, and a witty madnes : but in old men whose senses are withered, it becomes naturall, therefore more full and perfect.

20) Gardner, H., ed., *The Elegies and the Songs and Sonnets*, Oxford, 1965.

21) Paradox II.

22) Sermon, V. p.302.

Donne は Paradox を証明していく最後の部分で ‘sceptique’ に関して 4 つの対比を見てみよう。

Truely, as amongst Philosophers, the Sceptique which doubts all is more contentious then eyther the Dogmatique which affirmes, or Academique which denies all, So these uncertane elders, which both call them fantastique, which follow others inventions, and them allso which are led by ther owne humors suggestion, more fantastique then eyther. Those Sceptique philosophers, that doubted of all, though they affirmed nothing, yet they denied nothing neither, but they saw no reason in the opiniors of others.

その他 Problems の中にも Donne はこの言葉を使っているが、当時 ‘atheists’, ‘sceptique’ が大きな問題になっていた。特定の人物としては Sir Walter Raleigh がいる。Why doth Sir Walter Raleigh write the Historie of these times (Problem II)

Paradox IV (*That Nature is our worst Guide*) は自然は人間にとって最悪の案内人である、という *paradox* である。この *paradox* においても ‘nature’ の意味を様々な意味に使いながら証明していく *paradox* III と同じ型である。*Lovejoy* と *Boas* の説によると特に ‘nature’ は最も *ambiguous* であり、*equivocal* であると言う。

Paradox V (*That only Cowards dare dye*) は普通、英雄が勇敢に死ぬと考えられている中で「臆病者」の Paradox である。説教の中に “*Militia, vita ; our whole life is a warfare ; God would not choose Cowards.*” (我らの全生涯は 1 つの戦いである。神は臆病者を選びたまわな) という言葉がある。説教の中で、この言葉は前の長い文の後に来て、短かく含蓄のあるものとなっている。青年時代に書いた Paradox と説教が語られた年月は 25 年以上もへだたってはいるが、類似した文章が見られる。

Fortiter ille facit qui miser esse potest.

But it is taught and practisd amongst our Valiants, that rather then our reputation suffer any maime, or we any misery, we shall offer our brests to the canons mouth, yea to ourswords points. And this seemes a brave, a fiery sparkling, and a climbing resolution, which is indeed a cowardly, an earthly, and a groveling Spiritt. Why do they chaine these Slaves to the gallyes, but that they thirst their deathes, and would at every lashe leap into the Sea. Why do they take weapons from condemnd men, but to barr them of that ease which Cowards affect, a speedy death? Truly this life is a tempest, and a warfare ; and he that dares dye to escape the anguishs of it, seems to me but so valiant, as he which dares hang himself, least he be prest to the warrs.

朝 倉 秀 之

この Paradox は後に書くことになる *Biatharatos* (『自殺論』) の中にも引用されており, Donne が独創的に考えだしたものではなく, Aristotle から学んだことを Donne 自身が記している。

Paradox I (*That all things Kill themselves*) は, 死を取り上げている点では同じように見えるが述べてあることは Paradox V とは異なる。だから Donne は Paradox を遊びとして書いたのであると簡単に結論づけることはできない。この事実から前に述べたように Evelyn Simpson は Donne は真面目に Paradox を書いたのであるとしているし, P. N. Siegal は Donne の Paradox は当時の人々の考えを破壊し, 固定化している意識をゆさぶるために書いたのだ, としている。この Paradox I の内容は, 一般的に人間は自然に死んでいると思っただろうが, そうではなく, 「全てのものは自らを殺している」という命題である。全てのものは何のために生きているかで悩む。死ぬのは自然の摂理というだけでなく, その自然を理解する知識も必要なのである, と Donne は論じていく。

Yet least some thing should repaire this common ruine, we kill dayly our bodyes with Surfets, and our Minds with anguishes. Of our Powers, remembring kill our Memory. Of affections, Lusting our Lust. Of Vertues, giving kills Liberality. And if these things kill themselves, they do it in ther best and supreme perfection: for after perfection immediattly followes exces:

Paradox VI (*That the guifts of the body are better then of the mind or of Fortune*) は, 精神が大切であるとする意見に対する肉体が精神よりも良いという Paradox とその証明である。次のように始まる。

I say againe that the body makes the mind. Not that it created it a mind, but formes it a good or bad mind.

この Paradox では言葉遊びの展開ではなく, 何故肉体が大切であるかの論理的な証明の方法が使われている。Donne 自身 'The Exstasie' の中で歌う。

But O alas, so long, so farre
Our bodies why doe we forbear?
They're ours, though they're not wee, Wee are
Th'intelligences, they the spheare.

We owe them thankes, because they thus,
Did us, to us, at first convay,

Donne と Paradoxical Technique

Yeelded their forces, sense, to us,
Nor are drosse to us, but allay

(11.49~56)

‘body’ に対する考え方が詩にも同じように出てはいても、そのことが即 Donne の意見ということではなく、Donne の詩の中に paradoxical idea があると言うことができる。そのことをもう少し他の詩の中に見てみよう。

Yet call not this long life ; Bot thinke that I
Am, by being dead, Immortall ; Can ghosts die? (‘The Computation’, 11. 9-10)

Except it bee too late, to kill me so,
Being double dead, going, and bidding, goe. (‘The Expiration’, 11. 11-12)

Yet stay with mee since thou art come,
Circle this fingers top, which did’st her thombe.
Be justly proud, and gladly safe, that thou dost dwell with
me
She that, Oh, broke her faith, would soon breake thee.
(‘A Jeat Ring Sent’, 11. 9-13)

Falshood is worse then rate ; and that must bee,
If shee whom I love, should love mee. (‘Loves Deitie’, 11. 27-28)

To Love, and Griefe tribute of Verse belongs,
But not of such as pleases when ’tis read,
Both are increased by such songs :
For both their triumphs so are published,
And I, which was two fooles, do so grow three ;
Who are a little wise, the best fooles bee. (‘The Triple Foole’, 11. 17-22)

Donne の詩の中に paradox または paradoxical idea が数多く見られる。一篇一篇の詩に ‘A Paradox’ という題が付いていたとしても成立する。逆に言うと Donne の詩を成立させる要素としての ‘paradox’ があると言うことができる。Donne は基本的には詩人であったし、英文学史の

朝 倉 秀 之

中でも詩人としての地位を得ていくであろう。しかし、彼の生涯の後半生で、Donneの創造力は説教という散文の中で発揮しなければならなかった。詩の中でしてきたように散文の中でも喜び、驚き、感動させることができた。

Paradox VIII (*That good is more common then evill*) は善が悪より広がっているという、普通なら悪か善を負かしてしまうところでの Paradox である。

And as Enbroderers, Lapidaryes, and other Artisans can by all thing adorne ther works, for by adding better things they better them so much, by equall things they double ther goodnes, and by worse they encrease ther Shew, and Lustre, and eminency, So good doth not only prostitute her owne amiablenes to all, but refuseth no ayd, no not of her utter contrary evill, that she may be more common to us.

IV

英国に16世紀以降入って来た文学形式としての paradox が流行したのが動機となって Donne が paradox を書くことになった。それらの paradox がどのように展開されているかを見てきた。Donne の paradox を論ずる上で必ず問題になってきたことは、Donne が本気になって paradox の内容を信じて書いていたか、ということである。その答えは二通りあった。この小論での答えは、Helen Peters の説—‘the Paradoxes are neither entirely serious nor merely intellectual jugglery’—を取ることになる。paradox が知的言葉遊びの面もあるし、「不一致」の paradox のように真面目に論じられているものもある。さらに付け加えるなら、全体として言えるのは *Paradoxes and Problems* と *The Sermons* 中にある paradox また paradoxical technique を対比させるとき、そこには変化があることが分かる。前者は paradox そのものが目的化しているし、後者は paradox や paradoxical technique を手段化しているのである。Donne の paradox や paradoxical technique の使い方にも Jack Donne 的用法から Doctor Donne 的用法へという変遷が見られることを付け加えることができるであろう。

1. Peters, H., ed., *John Donne : Paradoxes and Problems*, Oxford, 1980.
2. Gardner, H., *Donne : The Elegies and Songs and Sonnets*, Oxford, 1965.
3. Gardner & Healy, *Simpson's John Donne Selected Prose*, Oxford, 1967.
4. Miller, H. K., ‘The Paradoxical Encomium with Special Reference to its Vogue in England’, *MP*, liii, 1956.
5. Bennett, R. E., ‘The Addition to Donne's *Catalogus Librorum*’, *MLN* xlviii, 1933,
6. Spenser, T., ed., ‘Donne's *Paradoxes and Problems*’, *A Garland for John Donne*, Gloucester, Mass., 1931.
7. Potter & Simpson, ed., *The Sermons of John Donne*, I ~ X
8. Erasmus: *The Praise of Folie*.